

では、僅か数十トンの舟艇によって、コロンバンガラ島、揚陸の文字通りの決死的作戦に死をまぬかれ、最後は、十数トンの木造漁船による磁気機雷の掃海任務。まさに六万九千トンの戦艦「武蔵」の勤務を思うと、感無量でした。いずれにしても、海軍々人としての根性と責務には何等変りはない、との誇りは今も持ち続けております。

コロンバンガラの砲戦

第六特別陸戦隊

広島県 吉岡光男

―大竹海兵団入団とのことですが志願をしたのですか。

私は徴兵で陸軍を志望したのですが、海軍の呉徴集、昭和十六年兵なのです。大正十年二月十七日、広島県の神辺町、旧竹専村で生まれました。徴兵検査では第一乙種で、十七年一月十日大竹海兵団入団です。家に

は慶応元年生まれの祖母、明治二十七年生まれの父と母、昭和六年生まれの弟と、小さい妹で、何とか留守はやっていけると思っていました。

海兵団に三ヵ月、四月十五日佐伯航空隊へ入隊ですが、当時は水兵で海兵団と変わらない、基礎訓練という教育を受けたのです。その後七月には呉海兵団で機関科となり自動車運転訓練を十一月まで受けたのです。

―海軍の訓練は陸軍とも違っていたようですが、吉岡さんの時はどうでしたか。

海軍の訓練は特に厳しかった。パッタという檣の棒、一メートル位の太い木刀というか鉄の柄のようなもので「軍人精神直入棒」と墨で書かれた棒で尻を叩く、というより殴るのです。殴られぬ日もあったが、大体平均的に殴られる日が多かった。他の班で音がすると「うちもやるか」と古兵がいつて始める。これは個人のミスばかりでなく、班で一人でもあれば団体の共同責任で制裁をされるわけです。

呉鎮で教育を受けてから十七年十一月呉の第六特別

陸戦隊に転属して、ブルドーザのような牽引車の運転をした。これは陣地構築用です。陸戦隊になってから自動車配置になったわけです。

第六特別陸戦隊が南方へ進出するので十一月呉を出帆、横須賀寄港の三、四隻で輸送船団を組んでラバウルに向かった。そのころは海上はまだ平穏だった。四十日ぐらいかかってラバウル着は年末でした。

正月はラバウルでした。正月後、コロンバンガラ島に上陸して陣地構築をした。昭和十八年ソロモン諸島付近は、海と空の激戦のあった所です。

第六特別陸戦隊は、十四センチの大砲(車輪の無い)を四門持っていきました。これは多分日露戦争当時のものか、陣地構築をやつて要塞砲としたのです。これを据え付けるのに牽引車が必要だったわけで、砲と一緒に積んで来たわけです。

ムンダ島へ渡つたこともあるが、第六特陸の主力はコロンバンガラで陣地構築をしていたが、十四センチ砲という、二等巡洋艦の主砲が十五センチですし、戦艦の副砲十センチより俥力がある。ただ旧式砲でし

たのです。作業は他に幕舎を建てたりしていた。

七月でしたが、敵が艦砲射撃をしてきた。偵察機が毎日のように来たが、砲爆撃はなかった。最初の攻撃は二十二時ごろから艦砲射撃があったのですが、射撃は島の端から端へとさぐり射ちをして来た。それでこちらも十四センチ砲の火蓋を切つて射ち出したら、集中射撃を食つてしまった。

その最初に、私は右側胸部に砲弾の破片が盲貫創だったのです。コロンバンガラでは治療といつても結局は患部の肉をえぐり取るだけしかない。南方なので傷口に蛆虫がわいて中々癒らないのです。そこで、ラバウルに帰つて第八海軍病院に一時入院した。半月ぐらいで正式の病院船が来て、身体に破片が入ったまま内地帰還のため出発したのですが、マラリヤ三日熱にも随分悩まされました。

入院するまで、コロンバンガラへの給与はどうだったのですか補給は、栄養は。

話は遡りますが、ラバウルでは食料はまあまあでしたが、コロンバンガラなどでは食料はなしです。とに

かく輸送船が皆途中で沈められたので食物は現地です。椰子の実は当然ですが野菜や、青い物はほとんどなしです。主食の米は、私が内遷するまでは多少はあったが雑炊に少し入る程度、その他は内地から持って来た、ひじき、ずいきなどの乾燥食物。しょう油も味噌もみな乾燥、暇な時は魚を釣って食べました。その間は幕舎の修理等をしたりで、余り戦闘らしい戦闘はなかったのですが、私が帰ってからは相当激しい爆撃があったらしいです。何しろ、ソロモン諸島やニューギニアは苦しい戦の連続でしたから。

話は元へ戻します。病院船はラバウルから出帆するのですが、各島からの負傷者もいたと思うが、負傷者で船は満船乗り切れないので、ラバウルの病院で内地護送と野戦病院へ残る者とを区別した。私はそこでも運が良くて内地組となって佐世保まで爆撃や潜水艦の雷撃もなく無事に着くことができました。

携帯履歴には「第一種戦傷右側胸部盲貫砲弾々片創」と書いてありましたが、やっと入院した佐世保で、

患者が次から次へと一杯になったので退院させられた。しかし、その時、私の右手は上らなかつたのです。

それから呉海兵団勤務となり、自動車庫の係となつたのです。そして十九年二月正式に兵科の水兵から機関兵となつた。

―呉というと、連合艦隊の根拠地ですし、呉空襲や広島原爆ということがありますが、戦争末期の本土の話をしてください。

二十年四月には連合艦隊も「大和」の沖縄特攻隊が出撃して全滅したりで、手も足も出なくなつてきました。五月十日、マリアナのB29型が多数空襲にきて、呉や瀬戸内の都市が焼夷弾攻撃を受け始めました。七月二十五日には呉軍港が艦載機の攻撃で被害を受けました。二十八日呉軍港の艦艇が大被害、八月六日広島に原子爆弾投下、八月八日福山夜間空襲。

以上のように呉附近は大変になってきました。呉空襲の時が一番厳しかったです。私等は自動車関係なので、消防車など出動させたりしました。しかしその時、呉

は全部やられて丸焼だった。軍港が空襲された時、港には軍艦など入っていたので擬装していた艦艇も大部分やられたらしい。

海兵団は軍港の側にあつたので、爆弾や焼夷弾を受け、数は当時つかめなかつたが、犠牲者は相当あつたと思います。われわれ自動車班は逃げまどう住民をトラックで運んで、山向こうの神山峠を越え、熊野へ避難させた。そこまで三、四十分ぐらいかかるから、そのため軍港の方の様子は余り良く判らなかつた。私たちは軍港や海兵団を守るといふより、住民を守つたわけです。

広島原爆の時はいわれわれは自動車を分散して神山峠の山の中で生活していた。山から原爆の入道雲は見たが他のことは判りません。呉―広島間は、当時汽車で四十分ぐらいかかる距離ですから、海兵団の中には救助に行つた隊もあつたようです。私は放射能の被害は、今何でも無いから大丈夫だったのでしよう。その後引き続き続いての福山は空襲でほとんど全滅したみたいだつた。

自動車班の長は上等兵曹で、十八人ぐらいの編成だった。山中での生活は大部粗末になつていたが、コンバンガラとは違つて何とか空腹はしのげ、これも運が良かったわけです。

九月一日予備役編入、一等機関兵曹に任ずとありますので、その日に復員となつたわけです。

留守宅では父が元気でポチポチ農業をやつていたし、慶応生まれの祖母も元氣、弟は兵隊に取られる年でないので一応皆元氣でいて、これも運が良かったといえましょう。ただ、胸の傷は今でも腕の上げ下げに不自由している。

南大東島 第三百二十三設営隊

福岡県 岸川 甚一

―岸川さんは経歴を見ますと陸軍から海軍へと転籍編入されたということですが、入隊の経緯を聞かせて下さい。